

吉田璋也の暮らし

— 暮らしを彩った器物を中心に —

東方 あかね

1. はじめに

鳥取駅から鳥取城に向かって徒歩5分の場所に白壁土蔵風の建物が並ぶ一角がある。鳥取民藝美術館、鳥取たくみ工芸店、たくみ割烹店と吉田医院である。これらは医師で民藝運動家の吉田璋也(1898-1972)が設立した施設である。1926年、柳宗悦(1889-1961)が誠実に作られた民衆の暮らしの道具の中に健やかな美を認める民藝理論を提唱すると、吉田は共鳴して1931年より郷里の鳥取で地元の職人の手を借りて土地に根差した技術や素材を用いて、時代の要請に即した暮らしの道具を生み出し、後に「新作民藝運動」と呼ばれる活動を展開した。またこれらを販売する店舗を創設し、生産から流通へというシステムを確立した。

吉田のものづくりの源泉となったのは、医学生だった1920年頃より始めた陶磁器などのコレクションで、現在その多くは鳥取民藝美術館に納められ、総数は3500点を超える。ただその形成過程について残念ながらほとんど記録がない。鳥取民藝美術館、吉田家に残されたアルバムの写真を眺めると、吉田の暮らしを写した写真には、暮らしに取り入れられ、身近に置き愛着を持っていた様々な器物が映り込むことに気付く。それらの中には現在、鳥取民藝美術館所蔵品になっているものも多い。そこで本稿では、写真を読み解き折々の吉田暮らしを彩った器物を明らかにするとともに、文献資料も併用して暮らしとその推移を追うことで、吉田の美意識、志向の変遷を辿りたい。対象とするのは医学生時代から1945年頃までとする。この医学生時代は、生涯の師となる柳に知遇を得るなどその後の人生の礎を築いた重要な時期であるが、この頃についての研究は少なく⁽¹⁾、特に柳との関係を結んでいく点を中心にその様相を明らかにすることから始める。

なお、吉田の生涯についてはそれを詳述した木谷清人の先行研究(木谷2015)に準拠する。

2. 新潟在住の頃(1917 - 1921年)

(1) 文献資料から

吉田璋也は1898年、父久治、母伴代の三男四女の長男として鳥取市立川町二丁目で生まれた。両親ともに医師の家系で、父親は骨董が趣味の開業医であった(鳥取新報社1930)。1923年25歳の時に璋也と改名するが、誕生時の名前は一郎である。「子どもの時から絵とか音楽には関心」(山陰合同銀行1965)をもち感受性が豊かな少年だった。15歳の頃には文学好きの同級生らと肉筆回覧雑誌『星』を創刊し、「雑誌白樺を手にして話題」(吉田1970)にしていた。1917年10月新潟医学専門学校第6期生として入学し、3年時に校内雑誌『攻瑤会雑誌』の編集委員に同期の式場隆三郎

(1898-1965) と共に就き友誼を結ぶ。「今までのやばなスタイルから脱却させ、純然たる文学雑誌にしたい」(式場 1962) と積極的に紙面改革を行うが、その中だけでは収まりきらない思いを発露する場として、1919年11月にアダム社を結成し雑誌『アダム』を創刊する。

アダム社は新潟医専学内外の『白樺』に憧れを持つ学生らが中心となり、雑誌の刊行の他、『白樺』に倣って泰西美術複製展覧会、講演会、音楽会、朗読会などの文化事業も開催し1921年11月まで2年間に渡って活動した⁽²⁾。『アダム』は学業の合間を縫って5冊、不定期に刊行され、創刊号の表紙は同人の寺田英俊(1890-1920)、以降は『白樺』の表紙を多数手掛けた岸田劉生(1891-1929)による。巻末には「アダム社記事」「六号雑記」の項が設けられ、同人たちの活動記録や生の声がりリアルタイムに掲載され、その時々動向、心情が手に取るように記されており、主にここから吉田の姿を探る。

吉田は『アダム』創刊に際して「健康に発育することを祝福する」(逸郎 1919)との言葉を贈り、通巻3号までの各号に「ある少女と青年」「幸福でない幸福」「死の前夜」と三作品を発表する。創刊号「編集室にて」(逸郎 1919)では武者小路実篤(1885-1979)を「無車」と『白樺』誌上で多用していたペンネームで呼び、武者小路の作品をそれ以前から愛読し親近感を持っていたことが窺える。また、武者小路の「新しき村」の思想に共鳴し、志を同じくする同期の式場、堀確、平石磐と共に患者本位の平等な医療、音楽や絵画が楽しめるような「新しき病院」(芳田 1920a、吉田 1920b、垣沼 1920c)を将来開設したいと考え、先ずは4人で1920年4月10日より一軒家で共同生活を始める。「アダムの家」と名付けた家は、2階の4部屋は各自の居室、1階の8畳間2部屋を共有スペースとし、同じ書籍を読み複製画に感動し夜更けまで話し合うなど互いに知識、感性、思想を共有し「兄弟のような生活」を送っていた。室内は「部屋はどれも本箱と複製画の額でいっぱい」(垣沼 1920b)で、吉田は「喜びに輝いた家」(吉田 1920a)と述べる。同時に新しき村新潟支部を創設し、同年9月13日に武者小路の講演会を主催し、また『アダム』に詩「進め進め」(武者小路 1921)の寄稿も受ける。

武者小路の講演会の6日後に、柳の妻でアルト歌手柳兼子(1892-1984)の独唱会をアダム社主催で開催する。「日頃尊敬している柳宗悦先生が朝鮮との温かい友誼を結ぶための御運動の一部を手助けするため」(隆三郎 1921)であった。柳は1919年の三・一独立運動を機に「朝鮮人を思ふ」という文章を『読売新聞』誌上に発表し、日本政府の政策を公然と批判し以降一貫して朝鮮の人々に寄り添う立場をとる。また1920年4月には「『音楽会』趣意書」を兼子と連名で著し、朝鮮での活動資金調達のために兼子のリサイタルを開催する旨を表明し、その活動の一環として新潟でも開催された。当日は800人近い聴衆を集め「柳先生御夫妻も自分達の小さい厚意を過分に欣んで下さった」(隆三郎 1921)。

ところで柳の名前がアダム社の活動として挙がるのは、この「7月から計画された」(隆三郎 1921)リサイタルが最初であるが、これに先立って柳にアプローチした人物がいる。堀である。『アダム』第3年第1号(1921年)「セテング・サン」と題した文の中で吉田、式場、平石と共に

1919年12月上京した際に、赤坂溜三會堂にて草土社主催展覧会でバーナード・リーチ（1887-1979）の作品を觀て感動し、翌年6月に小川町流逸荘でリーチ帰英告別展が開催されると、思い切つて面識なかったが柳にリーチ作品の購入の仲介を依頼する書簡を送り、そして実際に『Setting sun』と題される小さなエッチングと赤絵のどんぶりと樂焼の湯飲み」の3点を入手する。複製画ですら貴重だった当時、憧れの人物の「本物」の作品を柳を介して手に入れたことは同人に大きな歡喜と興奮をもたらした。

『アダム』ではこの件以前に柳との關係を窺える記述が認められないことから、堀の書簡を契機として柳はアダム社の活動の詳細を知り、兼子のリサイタル開催に至ったのだろう。柳が1920年12月10日「朝鮮民族美術館設立に就いて」を書き上げ『白樺』と『アダム』⁽³⁾に発表すると、堀は即座に同館設立のために寄付⁽⁴⁾をするなど、アダム社が柳との關係を構築する上で大きな役割を果たしたと考えられる⁽⁵⁾。

兼子のリサイタルの2週間後の1920年9月末から10月初めにかけて⁽⁶⁾、吉田、式場、堀、平石は上京し、武者小路に再会し新しき村の出版社曠野社に寄り、千葉県我孫子で柳、志賀直哉（1883-1971）らに会う。我孫子では宿に3日間滞在し、初めて訪れた柳の書齋に「別世界で、珍しく」（吉田1961）感じ「リーチ氏のものや朝鮮のものや、支那の数多の傑れた器に接する欣びを得」（堀1921）、「初めてビクターやコロンビアのレコードで歐米の一流の音楽家の演奏を聴き」（式場1956）と見聞きするもの全てが新しく衝撃的な経験をした。柳には「色々と厄介になった上にアダム社のためにいいレコードや複製画をたくさん贈ってください」（隆三郎1921）この時、吉田はリーチのエッチング「天壇」を手に入れ生涯傍らに置いて大切にした。

この医専時代で特筆すべき出来事は同人の寺田英俊の死である。寺田は『アダム』創刊号の表紙を描き文章も投稿し、当時30歳と年長で『アダム』創刊に際し尽力したと考えられるが、1920年3月「流行性感冒で1週間ばかりで死んでしまった」（垣沼1920b）。『アダム』にはこれを報告する記事以外では触れられておらず、それが却って言葉に表すことすらできない深い悲しみと苦悩を物語る。半年を経て式場がようやく他誌に寺田の死を念頭に置いたと思われる文章を著し、苦悶の中で書籍を読みあさり死について思索を深め「靈と肉との合一」という考えに至り、また医師としての決意を述べる（垣沼1920d）式場の文章ではあるが起居を共にする吉田も同様の考えを持ったと推測⁽⁷⁾され、医師として思想の礎がここに見られる。

吉田は1921年5月13日に医専を卒業すると間もなく左知代と結婚する。11月4日柳宗悦「朝鮮美術の特質について」の講演会、翌日第2回兼子独唱会を開催した。『白樺』第13巻第1号（1922年1月）「第八回朝鮮民族美術館寄附金報告」には「参百七拾五円 アダム社主催音楽会」と報告があり、これを以ってアダム社誕生からちょうど2年に渡る活動に幕を下ろした。

（2）写真資料から

次に、新潟医専時代を写した3枚の写真の検討をする。

図1は、1920年9月13日武者小路実篤講演会の日に撮影された写真で、武者小路夫妻を囲んで

16名もの若者が集い熱気を感じる一枚である。講演会後にアダムの家で開かれた茶話会の折に1階の居間で撮影されたものだろう。若者たちの背後の襖、長押の上、床の間に絵画が見られる。襖の絵画はミケランジェロ「アダムの創造」（1508-1512年、システーナ礼拝堂）の一部で、旧約聖書『創世記』に記された神が最初の人類のアダムに生命を吹き込もうと手を伸ばした瞬間の場面である。最初の人類アダムとアダム社の若者の姿が重なる暗示的な一枚である。その上の長押の額はロダンの彫刻「カレーの市民」（1889年、ブロンズ）の写真。これは『白樺』第1巻第8号（1910年11月）に掲載され、また式場が1919年12月に神保町清泉堂で購入する（垣沼1920a）。床の間の作品は判然としないがロダン「考える人」だろうか。アダム社ではロダンの作品写真を「ロダンは人類の光だ」との賛辞と共に販売し、またアダムの名称はロダンの作品に由来する。白樺の同人はロダンの彫刻に魅了され交遊を結んだが、アダムの同人もまた西洋芸術家の中でも特にロダンに惹かれていたようだ。

図2は、1921年2月7日撮影、吉田23歳、医専4年生で卒業まで約3か月の頃である。撮影場所はアダムの家2階の自室だろうか。籐の椅子に腰かけた着物姿の吉田の背後には、本がびっしり並び、その上には4枚の額が掛けられ、足元には蓄音機が置かれ、文学、美術、音楽を楽しむ青年像が浮かび上がる。額の作品のうち鮮明な2枚は、ミケランジェロ「デルフォイの巫女」（1508 - 1512年、システーナ礼拝堂）と、ミケランジェロ「モーゼ」像（1501-1504年、アカデミア美術館）⁽⁸⁾である。「モーゼ」像は、『白樺』第6巻第1号（1915年1月）ミケランジェロ特集号に掲載があり、また『アダム』創刊記念として1919年11月9日開催の第1回泰西美術複製展覧会を報じる11月11日付の『新潟新聞』にも掲載がある。これは式場が「新潟新聞社は写真班をつれて来たのでミケランジェロのモーゼとロダンのアダムとゴッホの自画像を撮って貰った」（垣沼1920a）と記しており、展示した約120点の作品の中でも展覧会を代表する作品として厳選した一枚であった。

図3は、1921年11月4日、アダム社主催で柳の講演会を開催した日に柳、式場と共に3人で写したものである。医専卒業以降もアダム社は同住所を拠点として存続することから撮影場所はアダムの家1階居間であろう。卓上にはカップアンドソーサーと陶磁器が無造作に置かれ、撮影の直前までお茶を楽しみながら、陶磁器について話に花を咲かせていたことが想像される。吉田家アルバムにはこの3週間前の10月10日に同一室内で撮影された写真が収められ、比較すると置かれる器物や絵画は概ね同様であり、柳の来訪に合わせて大きな改変はなく、普段の様相と考えてよい。

まず陶磁器は、卓上だけでなく背後の本棚の上にも朝鮮の合子や台付環状瓶などがあるが、吉田の背後の染付皿は、内面の絵付けが見えるように立てて飾られており、これらの陶磁器は観賞を目的として意図的に置かれていたことが判る。卓上の華瓶は10月の写真にはなく、その後入手したか柳が持参した可能性がある。陶磁器は、中国、朝鮮、伊万里焼の骨董的な価値を持つものである一方でカップアンドソーサーは当時の現行品である⁽⁹⁾。彼らは柳宅で陶磁器を観て以降、柳が1921年1月『新潮』に発表した「陶磁器の美」を読み、実際に作陶を体験し物作りの喜びを味わうなど、「陶磁器の美を知り始めた自分たちは随分とうれしい」（堀1921）と陶磁器に関心を持っていたことが文献に

記されるが、写真から東洋の古陶磁を手に入れ身近に置いていたことが明らかになった。

書架の本のうち背表紙が判読可能な作品を列記すると『レ・ミゼラブル』、長与善郎『彼らの運命』（1915-1916年）、志賀直哉『夜の光』（1918年）、武者小路実篤『野島先生の夢』、夏目漱石『明暗』（「漱石遺著」1917年）。文字は不鮮明だがデザインから函入の柳宗悦『宗教とその真理』（1919年）と推定できる本もある。書架には白樺派の作品が並び、愛読していたことが窺える。

柱に掛かるのは、ウィリアム・ブレイク「エヴァの創造」（1808年、水彩、ボストン美術館）である。『創世記』をテーマとし、アダムの肋骨より創り上げたエヴァを神が祝福する場面を描いており、新婚の吉田とオーバーラップする。柳は1914年に『キリアム・ブレイク』（洛陽堂）の大著を上梓し、アダム社では柳来訪直前の10月31日から11月2日まで柳と式場の出品から成るブレイク複製画展を開催しており、この作品には柳の影響が強く窺える。

吉田の背後の絵画は、ジョット工房が1330年頃に手掛けたアッシジ、サン・フランチェスコ聖堂下堂の4枚一組の天井フレスコ画のうちの1枚「栄光の聖フランシス」である。『白樺』では第6巻第5号（1915年5月）、第11巻第1号（1920年1月）でジョット特集が生まれ同作が掲載され、前者の号では柳が「ジョットに就いて」と紹介文を書いており、この作品には『白樺』、柳の影響が窺える。

また、同作は吉田にとって特に意義深い1点である。4枚一組の壁画のうち別の1枚「聖フランチェスコと貧女との婚姻」は柳が著書『宗教とその真理』（1919

年）の口絵として掲載する。吉田は「私が柳先生を訪ねたのは、先生が宗教哲学の権威者であり、『神について』とか『宗教とその真理』など先生がお書きになったもの読んで先生に私淑していたからです」（山陰合同銀行1965）と述懐し、学生時代に強い影響を受けた著作のうちの1冊として挙げる。同著の挿図はこの1点だけであり、吉田にとってこの作品は宗教哲学者である柳の象徴だったと言える。



図1 武者小路実篤を囲んで
新潟にて1920年9月13日
前列右より吉田、式場、武者小路（個人蔵）



図2 吉田璋也自室にて
新潟にて1921年2月7日（個人蔵）



図3 柳宗悦を囲んで
新潟にて1921年11月4日
右より吉田、柳、式場（日本民藝館蔵所蔵）

また棚の上には釈迦誕生仏と菩薩のような仏像が置かれ、それ以前にない指向で目を引くが、同著は仏教やキリスト教などの宗派を区別せず根源的な心理を追求したものであり、同一室内にキリスト教絵画と仏像が同時に存在することは、この柳の思想の影響とみられる。

ここで挙がる別の1冊の『神に就いて』（1923年）は医専卒業後の刊行なので齟齬があるが、学生時代と記憶するには理由があろう。同著は柳が生後すぐに亡くなった息子に捧げるが、ここで想起されるのはアダムの同人で早逝した寺田である。この身近でかけがえのない人を突然亡くしたという状況が重なり、吉田の印象に残ったのではないだろうか。室内の様相や吉田の述懐から柳の宗教哲学者としての面にも惹かれていたことが窺え、寺田の死もその契機の一つとなったことが考えられよう。

以上、吉田の学生時代について主に『アダム』の記述と3枚の写真から繙いた。『白樺』に影響を受けて創設されたアダム社の結成当初は、新しき村の支部を創設するなど武者小路に傾倒しロダンに代表される西洋美術に関心を持ったが、卒業の頃には柳と親交を結び、思想的な影響も受け、東洋陶磁器にも関心が広がり実際に所有していたことを明らかにした。

3. 鳥取帰郷以前（1922 - 1930年）

吉田は、柳の公演会の後、兵役に1年間就き、再び母校の研究室に戻る。2人の娘にも恵まれ柳が光代と慧代と名付けた。この頃、新潟市古町に住み1923年1月から翌年5月まで新しき村新潟支部を担っていた。1924年3月10日に撮影された家族写真がある（図4）。26歳の吉田の背後には本棚、右手にはアダムの家にあったテーブルと蓄音機、左手の棚の上には陶磁器が2点置かれる。背が高い方は朝鮮の白磁面取壺であろうか。他の1点は、現在鳥取民藝美術館の所蔵品の景德鎮青花松竹梅文壺（17世紀）である。柱の絵画はブレイク「ユリゼン」（1794年、色彩版画）⁽¹⁰⁾である。書架の背表紙のうち判読できるものを列記すると、小泉鐵『天才の手紙』（1918年）、武者小路『向日葵』（1915年）、同『彼が三十の時』（1915年）、同『友情』（1920年）、『老子』。また、背表紙に9つの円が並ぶ特徴的なデザインの本は、予約のみで販売された『武者小路実篤全集』である⁽¹¹⁾。武者小路ら白樺派の著書を愛読すると同時に、『老子』や絵画や陶器には柳の影響が窺える。

1924年10月から1年間、医専時代の恩師星野貞次の誘いで京都市聖護院に転居し、京都帝国大学医学部耳鼻咽喉科医員として研究に励み、1927年に医学博士号を取得する。

1925年11月から2年間、倉敷紡績（株）倉紡中央病院耳鼻科医員となる。この病院は1923年大原孫三郎（1880-1943）が、「病院くさくない明るい病院」を目指して来院者が心身ともに癒せるように院内に絵画をかけるなど患者本位の病院として開設した。この頃の吉田を知る資料はほとんどないが、この病院は新しき村の病院として描いたプランと重なる部分も多く、吉田も大いに示唆を受け、後の考え方や人生に大きな影響を受けたことだろう。

1927年11月から半年間、盛岡市天神町に居を構え、日本赤十字社岩手支部盛岡赤十字病院耳鼻咽喉科医長として勤務する。長女の小学校入学に際して1928年春頃に撮影されたとみられる家族写真（図5）には様々な器物が映り込み、その中には現在鳥取民藝美術館の収蔵品となっているものも

ある。それは右端の中国の朱塗折畳式卓、その上右の白釉小壺（北宋）、次女慧代の背後の3点の陶磁器のうち左の青磁鉄絵草花文瓶（高麗時代）。慧代の横の2点、景德鎮青花松竹梅文壺（17世紀）、青花花文八角水滴（朝鮮時代）、壁面の左側の下辺が鋸歯状の長方形の布である。これはインド製の戸口上部に掛ける飾り布⁽¹²⁾で、赤、青、黄色の糸で精緻な刺繍やミラーワークが施された華やかな一枚である。詳細な経緯は不明だが柳に貰った「象の腹掛け」として伝わる。壁面の右側の絵画は『白樺』第13巻第3号(1922年3月)にも紹介されたミレー「羊飼いの少女」（1863年、油彩 オルセー美術館）部分である。床には濃淡の様子から裂織と推定される敷物を敷く⁽¹³⁾。

柳は、吉田の倉敷や盛岡の家を訪ねており、この頃から「(吉田は)器物に著しく興味を持つようになった」(柳1938)と述べる。盛岡の室内の様子は、先の新潟の写真(図4)と比べると朝鮮や中国の陶磁器などが多数映り込みその種類と数が格段に増えており、この柳の言説を裏付けるものである。

1928年5月に大阪濱地病院副院長の職を得て関西に移住し、翌年7月から帰郷する1930年の暮れまで大阪大同病院で耳鼻科部長として勤務する。またこの頃大阪女子高等医学専門学校の設立にも参画⁽¹⁴⁾し、後に教壇にも立つ。関西では、当初大阪西成に住んでいたようだが1929年から1930年頃は現在重要文化財の奈良市今西家書院に居を構え、土間をリフォームして「吉田病院」を開設し、近所に住む志賀とも交遊を持った。1929年晩春、京都の祇園階段下の道具屋で木喰仏「制誉和尚像」を入手する⁽¹⁵⁾(吉田1962)。自宅の家具や食器は、好みに合わせて地元の職人や赤膚焼窯元にオーダーしていた。また柳から「一時民藝館の蔵品を預か」(柳1938)り整理し、この機会に柳が汲み上げた民藝美の基準となる作品を手元に置いて目を培ったことが、その後の蒐集活動や、新作民藝運動初期に現代まで生産が続くロングセラーを生み出す礎になったであろう。

4. 鳥取在住の頃（1931 - 1940年頃）

1930年年末に鳥取に帰郷すると、翌年から新作民藝運動を展開する。7月鳥取民藝協会を設立し、10月7日の京都市大毎会館「山陰新作工藝展」の開催を皮切りに次々と都市部で新作民藝品の展示販売会を開催していく。作品は牛ノ戸焼の陶器、木工、金工、染織、漆工、織物など多岐に及んだ。翌1932年6月1日に「鳥取民藝振興会」を設立し、たくみ工藝店（鳥取市本町1丁目。若桜街道筋）



図4 吉田璋也の家族写真
新潟にて1924年3月10日。
右より璋也、光代、慧代、左知代（個人蔵）



図5 吉田璋也の家族写真
盛岡にて1924年春撮影か。
右より左知代、光代、璋也、慧代（個人蔵）

を開店し、翌年 12 月には販路拡大のため「たくみ工藝店東京支店」を銀座に開設する。

住まいは医院に併設され、1931 年 1 月に鳥取市本町 3 丁目に開業し、翌年 12 月立川 2 丁目に移転し、1935 年 3 月に元魚町に「吉田病院」を開設する。いずれも旧鳥取城下に位置し、たくみ工藝店から徒歩十数分圏内であった。本町と立川の家については残された資料は少ないが、元魚町の家は訪問した式場の記述や写真が複数残り、暮らしの様相を窺うことが可能であり以下検討する。なお元魚町の家は大工町通りに面していたことから吉田家では「大工町の家」と呼んでおり、これに倣う。

ところで吉田は、1938 年 6 月に応召し軍医として中国に渡ると、現地の人々の暮らしに関心を寄せ道具や食事、建物などについて鳥取の地元紙『因伯時報』に寄稿し、これを式場が『有輪担架』として 1 冊の本にまとめ 1940 年 3 月に出版する。出版記念会は、吉田は中国にいて不在だったが同年 5 月 12 日に柳、式場、河井寛次郎（1890-1966）らが集い鳥取で開催された。当日の昼食は料理上手な左知代が手料理でもてなしたが、その時に大工町の家で撮影された一枚を日本民藝館が保管する（図 6）。また撮影時期は不明だが、同じ室内で左知代を撮影した写真（図 7）が吉田家アルバムにある。この 2 枚の写真を見ると人物の背後の和筆筒、朝鮮の棚（吉田家に現存）に陶磁器が多数飾られる様子が目を引く。吉田は出征の際「帰るまでそのままにしてくれ」と言い残しており（式場 1940）、撮影時期に関わらず選品や陳列方法などは吉田の意向が反映されていると考えてよい。

2 枚の写真に写る陶磁器類は、ほぼ現在鳥取民藝美術館に所蔵される。まず朝鮮の棚には、青磁壺（朝鮮時代）、鉄砂線文壺（朝鮮時代）、信楽焼締黒流茶壺（江戸時代）、肥前竹文角瓶（江戸時代）、景德鎮青花松竹梅文壺（17 世紀）、粉青搔落牡丹文扁壺（朝鮮時代）、青磁鉄絵草花文瓶（高麗時代）、唐津草文壺（江戸時代）、和筆筒の上には徳利（同定できず）、瀬戸柳文石皿（江戸時代）、交趾三彩皿（16 世紀後半）、瀬戸藤文石皿（江戸時代）、背の低い方の和筆筒の上は、水滴（同定できず）、青花花文八角水滴（朝鮮時代）、唐津無頸壺（江戸時代）。床の間には、二川焼松文鉢（江戸時代）、白磁壺（朝鮮時代）が並ぶ。朝鮮の作品の多くは柳と吉田が共に京都で暮らしていた 1924 年頃より「柳先生が朝鮮に旅される毎に買って来て頂いたり、贈られたもの」（吉田 1963、吉田 1970）という形で入手している。日本の古陶については柳が『工藝の道』（1928 年）などの著書で紹介する品々と同工であり、これらには柳の強い影響が窺える。ただ和筆筒中央に飾られた交趾三彩皿については、この時までには柳が積極的に言及する文章は見出せず、吉田独自の視点による蒐集と考えられる。吉田は中国での蒐集品を鳥取に送っており、そのうちの 1 点だったかもしれない。

次に調度品を見てみる。床の敷物は裂織のようだ。座布団は、吉田が丹波布を参考に生産させた「因州木綿」を中央部に配するものが吉田家に現存しており、これと同工のようだ。座卓は吉田デザインで多用される木瓜面が採用される。銘々皿は半分ずつ色が異なる二色の皿であり、これは吉田が 1931 年にデザイン指導し現在も生産が続く牛ノ戸焼緑釉黒釉染分皿であろう。

また、大工町医院の吉田の書斎と推定される写真（図 8）がある。まず使われている家具類から見てみる。椅子は、全体の形は 19 世紀後半のイギリス製のものに似るが脚には車輪が付き、別角度から撮影した写真では背の中央に振梅文が写る。机の上には振梅文筆立、硯箱、木製傘電気スタンド、

壁には状差と本棚がある。吉田は木工品の製作指導に際して、17 - 19 世紀のアメリカ一般家庭の家具を紹介した“*Pine Furniture of Early New England*”(Russel1929)と、濱田庄司(1894-1978)らが昭和初期にイギリスで蒐集した家具を紹介した『英国の工藝』(石丸 1930)の 2 冊の本を柳から提示され参考にしており(吉田 1957)、椅子、状差、本棚はこの 2 冊の影響が窺える。楯梅文や車輪付きの椅子は吉田が好んだスタイルである。木製傘電気スタンドは『工藝』92号(1938年)で鳥取産として紹介される。硯箱は吉田デザイン指導の同工品が、カーテンは同柄を藍で型染した暖簾が鳥取民藝美術館に保管される。これらは全て吉田の意の下に鳥取で製作したものであろう。

書架には、月刊誌『工藝』の 1931 年刊行号を収める芹沢銈介(1895-1984)デザインの秩が認められる。その上の段には、織物を表紙に使用した『工藝』4号と 6号が飾られるが、既刊行誌のデザインとは異なる。1932 年刊行分は吉田デザイン指導の因州木綿を表紙に使用しており、この試作品だった可能性がある。

大工町の暮らしでは、盛岡の頃に比べて朝鮮時代の磁器、江戸時代の陶器が大幅に増えており、この十数年間に柳が民藝美を認めたものと同工品を吉田は積極的に蒐集したようだ。吉田は新作民藝運動開始以降「新作品の参考となるもの」(柳 1938)を目的に蒐集しており、美しい作品を身近に置き日々眺める暮らしの中から新作のアイデアが生まれたのだろう。また「暮らしで仕事の結果を絶えず試み」、「悉く新作品でうめようとした」(柳 1938)と柳が指摘する通り食器、文具、家具に至るまで暮らしの隅々まで自身でデザイン指導したものを実際に使用していた。

5. 北京在住の頃(1941 - 1945 年)

吉田は 1938 年に軍医として中国に渡るも、1940 年 4 月ころより中国の工芸の調査と産業の振興の任に当たり、11 月に除隊となると家族と共に北京で生活を始める。近代化の波により失われつつあった手工芸の振興を図り「物を造る人も、使っている人も生活をよりよくされる工藝」(吉田



図 6 大工町の家の居間にて 1
1940 年 5 月 12 日。左より式場、柳、左知代、慧代、一人置いて河井(日本民藝館所蔵)



図 7 大工町の家の居間にて 2
1935 - 1940 年ころ(個人蔵)



図 8 大工町の医院書齋か
1935 - 1938 年ころ(鳥取民藝美術館所蔵)

1941) を目指して陶器や染織品などを指導、生産し、北京市内に「華北生活工藝店」設け、また蒐集した民藝品を基に「華北現代民藝館」の開設を企画する。柳は 1940 年の訪中を基に中国民藝の調査、蒐集、保存維持と発展の必要性を説いており(柳 1941)、これが中国での吉田の活動の支えとなっただろう。

中国での暮らしは「相手の文化をみとめ、これを使いこなす」ことが肝要と考え、現地のを積極的に取り入れようとした(吉田 1942b)。1941 年 2 月頃より北京西城豊盛胡同、1943 年 1 月頃より北京内四区大将坊胡同に居を構え、いずれの家も北京市中心部の伝統的な建物であった。吉田宅に 1943 年 9 月 17 日に宿泊した外村吉之介(1898-1993)は「北支民藝の優品が無数に集まっている」(外村 1983)と述懐する。これらは 1945 年に北京から「ひきあげに際して吉田君は、自分の集めた北支民藝品をいちいち写真で記録してそれだけを持って帰って」(式場 1960)おり、この写真を基に 1956 年私家版『現代中国民藝図録(華北編)』編む。陶磁器、ガラス、木工、家具、金工、編組類、切り紙類で 184 点に及ぶ。

図 9-11 は 1944 年 8 月刊行の雑誌『華北』「現地日本人の住まひ方」に掲載の大将坊胡同の家の室内写真である。同誌には近代的な住宅に住む家庭も紹介されており、吉田が意識的に伝統的な建物を選択して住んでいたことが判る。

図 9 は、吉田の父も含めて家族 5 人の食堂での食事風景である。食器類は「ただ普通の、当たり前品物」で、「今も焼かれている」現行品の中から美意識に沿ったものを「選択」して使用する(吉田 1942b)。写真に写る器物と先述の『現代中国民藝図録』の掲載品と照合すると、椅子や戸棚は「北京産」、右手の飾り棚の皿は「石家荘郊外産三彩大皿」、壁掛け式の飾り棚の瓶は「山東省博山産油灯」や「磁県彭城鎮産油灯」、戸棚の上の土瓶は「天津郊外産土瓶」、部屋の隅の籠は「山東高密産楊製籠」、間仕切りのカーテンは「河北高陽産木綿地」など酷似するものがある。同著に掲載品の一部は吉田の北京での暮らしを彩っていたようである。また左知代が手に持つ茶碗は齋手の絵付けがあり、「満州民藝品の一代表」(外村 1944)と評価されていたものである⁽¹⁶⁾。

図 10 は食堂に続く居間である。手前の椅子は柳の木を曲げることでスプリングを効かせた吉田デザイン品で、座面にはチベットの絞り染めのフェルトを敷く。壁には石仏の写真、ガラス絵、絵画が掛かる。このうち絵画は武者小路の肉筆水彩画で、薩摩芋、大根とくわいが描かれ「北京にて 実篤」と書かれるようだ⁽¹⁷⁾。武者小路は 1943 年 4 月に北京を訪れ、吉田の案内で絵のモチーフの野菜を市場で購入しており(吉田 1943)、この時に描かれた作品を本人から直接入手したのだろう。この北京での交遊は、武者小路も「僕の友人の民藝の吉田君」(武者小路 1944)と面会したと記録する⁽¹⁸⁾。

図 11 は 3 畳ほどの吉田の書斎である。部屋の床面全体を上げて、掘り炬燵のように机の下に火鉢を置いて暖を採る工夫をする。中央卓上には『民藝』1944 年 3 月号、吉田が向う机の上は白樺派の長与善郎『東洋の道の美』(1923 年)、ブルーノ・タウト『ニッポン』(1941 年刊行版)が置かれる。ドイツ人の建築家タウト(1880-1938)は 1933 年来日し 3 年半滞在し工芸の指導を行い、1935 年工芸店「ミラテス」を銀座に開設する。この店舗は「たくみ工藝店東京支店」の近所にあり、タウト

と柳は交遊があり、吉田も影響を受けたことが推測されるが、確かにタウトの著書を読み学んでいた。

また書斎と居間に河井寛次郎の作品「白地草絵扁壺」「辰砂菱花文鉢」が写る。入手の経緯は不明だが1940年10月に河井、柳、式場、濱田は吉田の招きで北京を訪れており、この時の手土産だったかもしれない。残念ながらこの2点は現在所在不明である。

北京での暮らしは、伝統的な住宅に住み、土地固有の器物を積極的に取り入れ、現地の材料や技術を用いてデザイン指導した品を使っていたことを示した。ここでは、暮らしの中の品がほぼ現行品である点が注目される。蒐集品をまとめた本のタイトルが『現代中国民藝図録』（傍点筆者）であり、「私はもう眼を現代と将来に向けたい」（吉田1941）と宣言するように、中国では辛うじて命脈を保っていた人々の暮らしを担う手工芸に美を認め、掬い上げ、未来に継承することに重点を置き活動しており、暮らしの様相からもこの姿勢が伺える。

6. むすび

本稿では吉田の暮らしを彩った器物から、1920年代は『白樺』に影響を受けて西洋美術に関心を持つが、柳と知遇を得たことで次第に陶磁器など東洋美術にも目を向け、1930年代になると民藝理論に共鳴し、古民藝の蒐集と、現在の暮らし豊かにする新作民藝の創出に力を注ぐ。1940年代に中国に転居すると現地、現在から未来へという点に主眼を置き蒐集と創出をさらに進展させたことを明らかにした。こうして蒐集した作品を今後のものづくりに生かすため1940年頃から温めていた美術館構想を実現させ、鳥取駅前の人々が暮らす日常の一角に1949年、4畳半2階建ての小さな土蔵に「鳥取民藝館」を開設する⁽¹⁹⁾。また今を生きる人々の生活に供するため、鳥取たくみ工芸店の再建、渋谷東横百貨店や梅田阪急百貨店など都市部での新作民藝展を次々開催し、数多くの作品を世に送り出した。

風土が日本と全く異なる中国での経験から、暮らしは土地から生まれることを更に意識しただろう⁽²⁰⁾。戦後は、鳥取文化財協会の設立に携わり、鳥取砂丘、鳥取城跡、仁風閣の保存運動にも積極的に取り組み鳥取の文化財保護に大きく貢献した。またその視座は鳥取に留まらず国境を越え、「世



図9 北京大将坊胡同の家の食堂
1944年（鳥取民藝美術館所蔵）



図10 北京大将坊胡同の家の居間
1944年（鳥取民藝美術館所蔵）



図11 北京大将坊胡同の家の書斎
1944年（鳥取民藝美術館所蔵）

界平和と民藝」(吉田 1947)と題した文章を表し、民藝を通して世界平和に寄与したいと述べる。一方で、医師として目の前の患者さんに心を寄せることを忘れず、1952年の吉田医院の建設に際しては患部だけでなくメンタルを含めて心身ともに総合的に癒すことを考え「温かく迎えて、慰めを与えるような部屋」(吉田 1958)にしたいと木の温もりがある院内にゴッホやセザンヌの絵画を掛けた。最晩年、武者小路の詩を引用し「一人でも多くの人を喜ばせたい」と語る。生涯を振り返ってみるとこの思いが人生を貫いており、その根をたどるとアダムの家に至る。学生時代に過ごした2階建ての家が吉田璋也の礎になっている。

本稿は未だ不十分な点も多く、今後も研究を深化させたい。

謝辞

本稿は、担当した鳥取民藝美術館令和5年度後期展示「写真でたどる吉田璋也の暮らし」展を基にしています。鳥取民藝美術館所蔵資料、吉田家所蔵資料の実見と使用については、吉田章二館長、理恵夫人に多大なるご配慮をいただき、また日頃の木谷清人氏、尾崎真理子氏からのご指導ご鞭撻なくして本稿を成しえませんでした。心より感謝申し上げます。また会期中様々な方にご助言を賜りました。本稿を成すにあたり下記の方々にお世話になりました。記して謝意を申し上げます。

石崎泰之、佐藤杏、杉山亨司、高田健一、古屋真弓、山田真理子、鳥取県立図書館、鳥取民藝美術館、鳥取民藝協会、鳥取たくみ芸店、たくみ割烹店、日本民藝館、武者小路実篤記念館

註

- (1) 新潟医専時代の吉田の動向については木谷清人(木谷 2015)の研究と式場が中心ではあるが藤井素彦(藤井 2021)の研究がある。
- (2) 『アダム』は1921年2月に第3年第2号を刊行後、2年間の空白を経て式場が東京で再刊するが、活動場所や構成するメンバーなども異なり、区別して考える。
- (3) 『白樺』第12年第1号(1921年1月1日刊行)、『アダム』第3年第1号(1921年1月19日刊行)
- (4) 堀は1921年1月20日到着分までの寄付金者を報告した「朝鮮民族美術館第一回寄附金報告」(『白樺』第12年第2号)に1円の寄付をする。吉田は第3回と第4回に1円ずつ寄付をしている。
- (5) 柳は1938年の著述内で「堀確君は今蒲田で開業し、耳鼻の医者で名を成している」(柳 1938)と堀の近況を報告しており、その後も交遊が続いていたようだ。
- (6) 吉田は、我孫子に初めて柳を訪問したのは「大正九年初夏」(吉田 1966)と記すが、最も古い『アダム』の記事「九月の終から十月の初にかけて」(隆三郎 1921)が正しいだろう。
- (7) アダム社時代の写真として残る数葉の写真では、どの写真も吉田と式場は隣同士に写り、アダムの同人の中でも特に親しかったようだ。また交遊は生涯続いた。
- (8) 木谷清人氏のご教示による。
- (9) 石崎泰之氏のご教示による。
- (10) 尾崎真理子氏のご教示による。
- (11) 武者小路実篤記念館 佐藤杏氏のご教示による。

- (12) 尾崎真理子氏のご教示による。
- (13) 当時、上賀茂民藝協団の青田五郎（1898-1935）が裂織を始めており、吉田もこの影響を受けて入手したのかもしれない。
- (14) 大阪女子医専は西日本で最初の女性のための医育機関であった。吉田は戯曲「幸福でない幸福」（芳田 1920b）にて医師志望の女学生を描き、長女の光代は大阪女子医専、北京大学、京都大学を経て小児科の医学博士になっており、吉田は女性の教育において先進性があったことが窺える。
- (15) 現在鳥取民藝美術館所蔵品である。柳が木喰仏調査の成果として 1925 年 7 月 2 日京都府立総合図書館にて開催の「木喰五行上人木彫佛展覧会」の写真に柳、式場らと共に吉田も写真に写ることから、この時には関心を持っていたことが判る（杉山 2018 掲載写真より）
- (16) 類品は奉天の肇新窯業会社や興隆山の満州陶磁会社で生産された。同工品は鳥取民藝美術館所蔵品にはないが、金谷は倉敷民藝館が所蔵することを指摘する（金谷 2000）。『倉敷民芸館図録』第三集（外村 1988）No. 90, 91 興隆山窯業会社製の碗。
- (17) 武者小路実篤記念館 佐藤杏氏のご教示による。
- (18) 北京で 2 人が一枚に納まる写真を武者小路実篤記念館が所蔵する（武者小路実篤記念館 2024）
- (19) 翌年隣接地に建設の木造建物に移り、1957 年に耐震耐火の現在の建物に移る。
- (20) 戦前の活動としては、1931 年『大阪毎日新聞（鳥取版）』に柳が投稿した箕浦家武家門の保存を訴える記事を受けて、吉田が尽力し、移築保存に漕ぎつけている。

参考文献

- 石丸重治（編）1930『英国の工藝』工政会出版部
- 市川市文学ミュージアム 2022『式場隆三郎と民藝運動』山田真理子（編）
- 逸郎（吉田璋也）1919「編集室にて」『アダム』第 1 号
- 垣沼（式場）隆三郎 1920a「アダム社記事」『アダム』第 2 年第 1 号
- 垣沼（式場）隆三郎 1920b「アダム社記事」『アダム』第 2 年第 2 号
- 垣沼（式場）隆三郎 1920c「新しき村の病院」『新しき村』第 3 年 7 月号 新しき村東京支部
- 垣沼（式場）隆三郎 1920d「開かれた扉」『新しき村』第 3 年 9 月号 新しき村東京支部
- 金谷美和 2000「『民衆的工芸』という他者表象」『民族学研究』
- 華北交通株式会社東京支社 1944「現地日本人の住まい方」『華北』
- 木谷清人 2015「吉田璋也の生涯」『吉田璋也の世界』（公財）鳥取民藝美術館
- 京都文化博物館・宇都宮美術館・（財）ひろしま美術館・神奈川県近代美術館・読売新聞大阪本社文化事業部
2009『『白樺』誕生 100 年 白樺派の愛した美術』
- 山陰合同銀行 1965「人物登場 民藝研究家 吉田璋也氏」『ごうぎん』84 号
- 式場隆三郎 1940「山陰の民藝」『月刊民藝』日本民藝協会
- 式場隆三郎 1956「わが音楽への回想」（1954.4）『出頭没頭』現代社
- 式場隆三郎 1960「北支と満州の民藝の旅」『民芸手帖』24 号 東京民芸協会
- 式場隆三郎 1962「あの頃を回想して」『新潟大学医学部 50 年史』新潟大学五十周年記念会
- 『白樺』復刻版 1988-1989 岩波ブックサービスセンター
- 杉山享司 2018「我孫子から京都へ」『柳宗悦と京都』光村推古書院
- 世田谷美術館・東広島市立美術館・富山県美術館・名古屋市美術館・東映 2023『民藝 MINGEL』

東京国立近代美術館 2021-2022 『柳宗悦没後 60 年記念展 民藝の 100 年』花井久穂・鈴木勝男（編）
 鳥取新報社 1930 『鳥取県人名鑑』
 鳥取民藝美術館 2015 『吉田璋也の世界』木谷清人（編）
 鳥取民藝美術館 2017 『鳥取民藝美術館所蔵品調査報告書 朝鮮茶碗』石崎泰之（編）
 鳥取民藝美術館 2018 『鳥取民藝美術館所蔵品調査報告書 中国陶磁』後藤修（編）
 外村吉之介 1944 「口絵解説」『民藝』58 号日本民藝協会
 外村吉之介 1983 『満州・北京民芸紀行』花曜社
 外村吉之介（編）1988 『倉敷民芸館図録』第三集
 新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館 2021 『脳室反射鏡』藤井素彦（編）
 藤井素彦 2021 「式場隆三郎と白樺派」『式場隆三郎 脳室反射鏡』
 堀 確 1921 「小さい経験」『アダム』第 3 年第 2 号
 三重県立美術館 1997 『「平常」の美・「日常」の神秘 柳宗悦展』土田真紀・毛利伊知郎・佐藤美紀（編）
 武者小路実篤 1921 「進め、進め」『アダム』第 3 年第 2 号
 武者小路実篤 1944 「周作人さんとの友情・想ひ出など」『周作人先生とのこと』方紀生（編）光風館
 武者小路実篤記念館 2024 『「仙川の家」武者小路実篤 終の住処での 20 年』佐藤杏（編）
 芳田（吉田璋也）1920a 「六号雑記」『アダム』第 2 年第 1 号
 芳田逸郎（吉田璋也）1920b 「幸福でない幸福」『アダム』第 2 年第 1 号
 吉田一郎（璋也）1920a 「六号雑記」『アダム』第 2 年第 2 号
 吉田逸郎（璋也）1920b 「ある男の父に宛てたる手紙」『攻瑤会雑誌』第 17 号
 吉田璋也 1941 「厚民工芸の提唱」『月刊民藝』22・23 号合併号 日本民藝協会
 吉田璋也 1942a 「北支の新しき陶器」『民藝』33 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1942b 「北京生活と食器」『民藝』34 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1943 「北支通信」『民藝』50 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1947 「世界平和と民藝」『民藝動向』6 号 京都民藝協会
 吉田璋也 1957 「鳥取の洋家具」『民藝』51 号 東京民藝協会
 吉田璋也 1958 「職場の美化運動」『医家芸術』第 2 巻第 2 号
 吉田璋也 1961 「柳先生の目と舌」『民藝』102 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1962 「木喰上人 撰津仏の一体」『民藝』118 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1963 「朝鮮古民芸展を開く一亡き柳先生を偲んで」『民藝』128 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1966 「式場君と民藝」『民藝』157 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1970 「鳥取民藝美術館 創立満 20 周年記念 朝鮮古民芸展」『民藝』203 号 日本民藝協会
 吉田璋也 1974 「ありし日の文学少年たちの活動」『鳥城』第 7 号 鳥取西高校
 柳 宗悦 1938 「吉田君の進み方」『工藝』92 号 日本民藝協会
 柳 宗悦 1941 「北支の民藝」（東京放送局 1 月 25 日放送）『柳宗悦全集著作篇』第 15 巻
 隆三郎（式場隆三郎）1921 「アダム社記事」『アダム』第 3 年第 1 号
 Russell H. Kettell 1929 *Pine Furniture of Early New England*